

一分間に一万語

リングの死闘と新実存主義

ノーマン・メイラー ■ 山西英一 訳

TEN THOUSAND
WORDS
A MINUTE

and so covers over the
he remark, "He made a
persist, if you
digging through
look for oil, you are met with a
it's a question of taste whether or
st," is the winning reply. In his
dy more practical than a reporter.
idity for news which a businessman
bourgeois will hesitate to pick up
t fond of the man with whom he does
a nice story about a type he disl
out a figure he is fond of. It has
elings. There is a logic to news -
certain meteorological drift to the
story can only ride along certain
porter to be true to the precise

● ノーマン・メイラー

一分間に一万語

Kawade Paperbacks 98
一分間に一万語

TEN THOUSAND WORDS A MINUTE

by Norman Mailer

Copyright © by Norman Mailer

Japanese anthology rights arranged through

Rember and Zolotar, New York and

Charles E. Tuttle Company Inc., Tokyo

* "Ten Thousand Words a Minute" was first published in
Esquire Magazine.

THE DEBATE BETWEEN WILLIAM F. BUCK-
LEY, JR. AND NORMAN MAILER

by Norman Mailer and William Buckley

Japanese anthology rights arranged through

Rember and Zolotar New York and

Charles E. Tuttle Company Inc., Tokyo

* "The Buckley-Mailer Debate" was first published in Playboy
Magazine.

表紙構成 原 弘 (NDC)

昭和 39 年 5 月 20 日 初版印刷

昭和 39 年 5 月 25 日 初版発行

定価 280 円



訳 者 山西 英一

発行者 河出 孝雄

印刷者 矢部 富三

発行所 東京都千代田区
神田小川町3の8

株式 河出書房新社
会社

電話 東京(291)3721~7

振替口座 東京 10802

© 1964

印刷・三松堂印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取替えします

目次

一分間に一万語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

討論へアメリカにおける右翼の意味▽・・・・・・・・・・・・・・・・・123

訳者のことば・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・211

一分間に一万語

『一分間に一万語』への序

——死について——

チャンピオンは、非凡な意志の人間である——チャンピオンをクラブ・ファイター（まだ独立で、きかないで、クラブをおして練習や試合をしている、一流ボクサーになるまでのいわば二流どころのボクサーのこと）や挑戦者と区別する要素のひとつは、チャンピオンを駆りたてて、ほかの選手たちにはよくたえられないいくつかの危機を切り抜けさせる、強烈な衝動である。だから、チャンピオンがリング上で殺されるというチャンスは、つねに存在する。このことは、もちろん、パターンソーンリストーン第一回戦の基本的テーマであつた。その反響は、この一編のエッセイ全体にわたつてあらわれている。

死と実存的政治との密接な関係は、強いて主張する必要はない。改まった議論はもちろんぼくの力のよくするところではないが、しかし良心とか道徳的決定といったような問題が、英米哲学の言語分析家たちにとって本質的なディレンマとなつていゝように、フランスとドイツの哲学は、近代のヨーロッパ実存主義が、実存的ヴィジョンの論理的連コンタインメント統（死後にもひとつの

生があつて、それは生そのもののように実存的だろうという）をうけいれることをしぶった結果、不条理という——つまり、人間は、死が無意味であることを知っているのに、まるで死に意味があるかのように生きなくてはならないという——この無人の荒野に立ちどまらされてしまった。この啓示的知識を、ハイデッガーはかれの作業仮定としてうけいれ、サルトルはこれこそかれの哲学を樹立する基礎となる確実性であるとまで考えているが、しかしそれ（この）は、実存的倫理のための基礎をきずく可能性を殺してしまふ。ドイツ哲学は、人間は真正な生を発見する必要があるということを証明しようとして、座礁する。ハイデッガーは、人間はなぜ真正であるように気をつかわなくてはならないかという理由について、要するに、人間は自由であるためには、真正でなくてはならないというだけで、それ以上に深い説明をあたえることはできない。サルトルは、実存主義的コミットメントを唱えるが、この唱道は、スタイルのためのスタイルをもつて生活をおくることを主張する、小さな貴族的唱道に墮してしまふ危険がつねにある。死は生の実存的連続である、魂は輪廻転生するか、でなかったら、自然の連続コンティニウム体のうちに存在しなくなる（これは癌の無言の暗示である）ということ、を、あえて仮定しないなら、実存主義は根なしかずらである。だが、この仮定をうけいれれば、真正とコミットメントは、倫理の中心にかえてくる。この仮定をうけいれるとき、人間は自己の魂からの疎外、死ではない死、のような、つまり永遠へはいつていかないで、無のなかへ消えていくというような、

巨大な危険に直面しはしないからである。

この考えは、『一分間に一万語』のうちにとりあげられている。パレット対グリフィス戦のべたあとで、ちょっとした間、それにはっきり焦点がむけられる。それはまた、拙著 *Presidential Papers* 『大統領のための書』の多くのエッセイのうちに、いろんな形でくりかえされている。エスクワイア誌の十二月号（一九六二年）のわたくしのコラムには、ロバート・A・ソブレン博士の自殺に関する一節がのっている。博士はもう相当年輩の男で、アメリカ政府によりスパイの件で告発されたが、癌で死にかけていたので、控訴中保釈出所になった。そして、保釈中に逃亡して、飛行機でイスラエルにのがれた。が、同国に入国を禁じられて、アメリカへ強制送還される途中、イギリスで自殺をはかった。

かれは終身刑を宣告されており、癌で死なねばならぬ運命にありながら、しかも明らかに自分の運命は決定的であるという考えに満足しないで、妙なことに、二どまでも自殺をはかった。

かれにとっては、自分の死ぬ死に方に相違があるのである。かれはアメリカの監獄では死にたくないという、狂的な熱望をもっているらしい。かれの本能はかれに、じゃまものを取りのけて、スペースをつくり、プライバシーな死に場所を見つけよ、と告げる。だが、か

それは自分の本能を大きな情熱の力でもって表現する。それは秘密のヒントをあたえる。それは、われわれの死ぬ死に方、われわれの死のスタイル、その状態、気分、証拠が、つまらないものではないことを暗示する。われわれの死ぬ死に方は、われわれの死がむかう方向に影響をあたえるのではないだろうか？ ソブレンは癌に深くおかされている。人間は癌に非常に深くおかされて死ぬこともできるし、それほど深くおかされないで死ぬこともできる、ということがありうるだろうか？

われわれは明らかに政治的専心からは一光年も遠ざかっているが、しかもそれは越

えなければならぬ距離である。中世時代、人間は自分の生涯を死への準備としてたえしのび、ついには生が飢餓、悪疫、制御されない自然の蚕食によって滅びる危険におちいるほど完全に、この転移を生きぬいた。現代人は、自然を征服するにあたって、死を無視し、死のロジックを侵害する。その結果は、生の破壊であるばかりでなく、存在の破壊、この世界から永遠へおもむき、そしてそこからまたかえってくるわれわれのルートの破壊となるかもしれない。社会の直接目の必要にばかり専心する政治は、かつて神学が生のいっさいの可能性を虐殺したように、死を徹底的に殺すのだ。

1

人間的、動物的、軍事的という、三種類の知性についての、あの古い洒落しゃれをおぼえていられるだろうか？

ところで、ひとくちに文筆家といっても、小説家、詩人、それから報道記者ほうどうしという、三種類の文筆家があるとすると、詩人と小説家のあいだには、たしかに深淵がよこたわっている。両者の生活ぶりは全然別として、詩人といえは、いつもきままって貴族、それもたいていは手がつけられないほどスポイルされた貴族のようにおもえるが、小説家となると——たとえば百万ドルかせいでも、または非常な才能をもっている——どこかしら労働者階級的な匂いがする。たぶんこれは、退屈な、骨身をけずる仕事のせいであり、長いあいだの、強迫観念じみた内的生活のためであり、いつまでもおんなじ仕事に打ちこんでいる、日々の単調さのためであらう。それともまた、家うちではさっぱりみとめてもらえないせいかもしれない——自分の細君に、無神経にがみがみ世話を焼かれて、よろこんでいる小説家なるものに、会ったひとがあるだろうか？

ところで、もちろん、ぼくはこの比喩のしめくりとして、報道記者は中産階級である、と断じたい。といっても、はたしてこの比喩をおしとおせるものかどうか、ぼくにはわからない。報道記者は、ひとりひとりとしてみれば、たしかに頭が固くて、客観的で、想像力に欠ける傾向がある。かれらの知性は堅実だが、粹にはまって平凡である。かれらは、うわさ話や、実話、伝説、いたずらの弁明、交渉の顛末、回想録の切れっぱし——つまり、中産階級にとって倫理と教養、またはそのいずれか一方の代用になるような、あらゆるカプセル入りのちっぽけな作り話を蒐集したがる、中産階級的な趣味をもっている。報道記者というやつは小売商人みたいに、なんでも競争に勝って、ほかの事実を全部おいかくしてしまふような事実を、ありがたがる傾向がある。中産階級のあいだでは、「あの男は大金を儲けた」といえば、それで話はおわってしまう。諸君がさらに食いさがって、その金は、あの男がおばあさんのお墓まで掘りおこして、石油を探し、そうして儲けた金なんですよ、とでもいおうものなら、さっそく中産階級的に肩をすぼめて、「昔のことを根掘り葉掘りするかどうかは、要するに趣味の問題ですよ」と、いかにも愛想のいい返事を聞かされるだろう。

人間として、報道記者ほど実的なものはない。報道記者は、商人が金に貪欲なように、ニュースにたいして貪欲である。ブルジョアは、取引の相手が虫の好かない男だからといって、そのため一ドルの金でも儲けることをためらったりなどしないだろう。それとおなじように、

報道記者は、自分のきらいなタイプの人間について、りっぱな記事をつくりあげたり、自分の好きな人物について、ひどい記事を書いたりする。それは、かれの感情とはおよそなんの関係もない。ニュースにはニュースのロジックがある——ある一定の日に、ひとつの記事は、マスメディアの風のまにまに、一定の気流ののって、一定の進路をすすむことしかできない。

報道記者にむかって、事件のこまかな点にまで、正確に、忠実であるように期待することは、回転の早い投資家にむかって、そのカバンのなかの株がみんな値上りしているのにある特別の株だけ値下りしているとき、その値下り株に忠実であるように要求する感傷とおんなじである。だが、ここでわれわれの比喩はおわる。中産階級がクラブのあつまりとか、なにか社交的なことで会合するとき、その雰囲気はおよそ退屈千万なものであるとおもって、まずまちがいない。ところが、なにかの記事のために、十名の報道記者が一室に鉢あわせすると、ちよつとヒステリックになる。それが記者会見のために二百名もの報道記者とカメラマンがあつまるとなると、それこそ猿の大群がやぶを押しわけ、かきわけ、めちゃくちやに突進するようなもので、威厳もなくそもあったものではない。もったいぶった、ペダンチックで退屈な、中産階級の威厳さえ、ひとかけらない。

これにはちゃんと理由があり、しかも大いにある。かれらは、なにか自分たちの記事に利用できるような引用を急いで手にいれ、それから電話を見つけないとはおもって、いつもせき

たてられている。最悪の場合、報道記者の生活は、午前と、午後と、晩を、ひとつの地下鉄のラッシュアワーから、ほかの地下鉄のラッシュアワーへと、とびまわってすごしているようなものだ。報道記者の最上の生活状態でさえ、いずれはラッシュアワーを思いおこさせるようになってしまう。ボクシングの老記者ともなると、それこそ見るも哀れだ。まるで懸賞試合の老マネージャーそっくりである。つまり、シガーの吸いながら同然だということである。

これはなにもスポーツ記者だけにかぎったことではない。純然たる癌の峽谷（メイラーは順応主義を病巣を癌の峽谷『キャンサ』ミタリといっている）みたいな悪臭を放つ政治記者にくらべたら、かれらはまだしも魅力があるほうである。こういっても、誇張しているとおもわない。どこの記者本部にも、それとすぐわかる匂いがある。それは、早くいえば、左翼の小さな集会場の匂いみたいだといってもいいだろう。ただ、それよりいやな匂い、それよりはるかにいやな匂いである。清廉な鉄を鼻にさしこむ貧しさが無いからである。反対に、酒でも、サンドウィッチでも、ニュース発表でも、すべてフリーサービスである。だが、機械に奉仕する肉の、静かに、ゆっくり焦げる匂いはさけることができない。

諸君は朝早く、喫煙者たちがみんな眠っていて、腐った空気がどんよりと、陰気によんでいる、古い客車の喫煙室をとったことがないだろうか？ 記者本部の匂いというのが、ちょっとそれに似ている。といっても、両者のちがいは大きい。アメリカの大きな試合の記者本部

となると、いつもきまって大きなホテルの、大きな部屋であり、たいていその都市の、いちばん大きなホテルの、いちばん大きな部屋だからである。したがって、営利本位のホテルの、営利本位の部屋、ということになる。壁は、いまでは汚れている、つまり、絹のストッキングの爪先みたいに、うっすら汚れている、淡いグリーンか、それとも淡いピンクの色でなくてはならない。(ついでながら、そのストッキングは漆喰^{しっくい}の匂いがする)。

まるでソビエトのパレスで、タシケントからやってきたビュロークラート^(官)たちと会ってでもいるようだ。ものすごく大きな、飾りものひとつない、むぎだしの会場、二十フィートの旗^{バナー}がかけられ、一方の端にはアーチ形の舞台額縁があり、そのアーチのなかには、高いゴシック式の窓がえがかれている——窓は、屋外に面していることはまずないといっている。(ホテルはどこでも、宴会場を建物の内部^{うち}につくる——それが建物のスペースを収益でみたす最上の方法である)。

この部屋は、熱病的に興奮している。二百名、三百名、おそらくは五百名もの記者たちが、これらの部屋のどれかにおしかけて、そこで話をし、酒をのみ、この記者本部をもうけたPR関係のひとたちが提供する、五十台のスタンダード型のタイプライターのどれかを叩きまくっている。まるで監獄の大パーティにでもいるようだ——ものすごく興奮していて、さかんに動きまわり、セックスはゼロである。ただ、会話だ。シガレットを吸いながらの会話。毎時間、

一千本から二千本のシガレットが吸われる。頭はたえず敏捷に回転していて、記事のネタを提供することができなくてはならない。（報道記者たちはたがいにネタを取引するために、まるで市場にでもあつまるように、ここへあつまるのである——そして、事件の当事者のひとりに関する、自分のほうではつかえない、ちよつとしたネタと、自分たちの新聞でつかえる別のネタとを、物々交換する。そのネタが真実であろうが、嘘っぱちであろうが、そんなことはいっこうおかまいない。ただ話がうまく合っていて、あまりにはつきり名譽毀損きそんにならないかぎり、OKである）。

こうして、かれらは、機械、ものすごく巨大な機械——ちよつとしたおつまみや、料理した軟骨、砂利、ごみ入れ罐、シャローロット・ルース（デザイナー用の一種）、古いゴムのタイヤ、骨つきのステーキ、ぬれたボール紙、枯れ葉、アップル・パイ、かけびん、犬の餌えさ、貝殻、油虫駆除薬、インクの切れたボールペン、グレープジュースを、毎日食べなくてはならない知的レビアタン（巨大な怪物）へ、おくりだすことができるニュースをかきあつめるために、かれらの肉体の内部を、炭みたいに黒焦げにしてしまうのである。あらゆる廃物、あらゆる残菜、あらゆる汚水に、少少の富が、毎日毎夜、あのアメリカの老山羊、つまり、われらの新聞の、腹のなかへおくりこまれるのである。

だから、報道記者はまた、この仕事の匂いをする。皿洗い機やポットの匂いをする。かれら

は山羊どもをやしなう機械、大山羊をやしなう機械に奉仕して、非常に静かに、非常にゆっくり、自分自身を焼いている肉である。報道記者たちの会議室へはいると、とたんに、この集団的臭氣がぶーんと鼻をつく。それはものの腐った匂いではない。食肉の氣が足りず、味や風味、肉の活力が十分ないので、いたんでも、腐った、おそろしい臭氣がしないのである。そうだ、それはむしろ權力にたいする過剰な畏敬心の匂い、烈しくて、しかも空虚な貪欲に食いつくされた肉の匂いだ。それはひどい風邪をひいて、熱が高く、すっかり消耗し、どんな氣分もぬけてたときの、頭の内部に感じられる、あの侘しい匂いだとおもう。

風邪をひくと、力が自分の内部で錆びついて、動かなくなっているという感じ、どこか自分の中心で、力のコイルがすっかりたるんでしまっているといった、肉体的感覺をよくおぼえるものだ。

報道記者は、無力な權力(powerless-power)の中に宙ぶらりんにつるさがっている。かれの声は、直接、またはリライト・デスクをとおして、間接に、何百万の読者のもとにたつする。自分の読者が多くなればなるほど、かれはますますものがいえなくなる。順応主義的に単純でない、プラスチックみたいに単純でない、つまり単調でない觀念をコミュニケーションすることを、大部分はかれら自身の内部にいる無数の検閲官によって、禁じられている。だから、報道記者は自分の肉を切り裂くのとおなじ習慣がつく。つまり、自分が当然信じないことを書くよう